

全国美術館会議  
機関誌  
全美フォーラム

ZENBI FORUM

全国美術館会議機関誌

# 全美フォーラム

ZENBI FORUM

01  
F-02

公開なくして大原美術館はない。  
大原美術館 柳沢秀行

02  
F-05

拡大する工芸／KOGEI  
石川県における国立工芸館移転後の状況  
石川県立美術館 中澤菜見子

03  
F-08

石巻文化センターの再出発  
—同センター所蔵の美術作品を対象とする文化財レスキュー活動の終了報告—  
元 宮城県美術館 三上満良

04  
F-11

博物館法改正と美術館の基本機能の可能性  
金沢 21 世紀美術館 相澤邦彦



思い出の一枚  
第 18 回総会集合写真 (昭和 44 年・石川県立美術館)

柳沢秀行

Hiroyuki Yanagisawa (大原美術館)

2020年は、大原美術館にとって開館90周年の記念すべき年であった。そのために、大型の特別展やシンポジウムなど様々な事業を準備していたが、新型コロナウイルス感染症拡大により、そのほぼ全てを中止・延期せざるを得なかった。それどころか、春から夏にかけてのハイシーズンに136日にわたる長期臨時休館を余儀なくされたことは、第二次世界大戦中できさえ、作品との出会いを求める人があれば、実質的にはその扉を閉ざすことのなかった当館にとっては、まさに未曾有の出来事であった。

その長期休館は、採算面でも深刻な打撃をもたらした。当館は、運営経費の約8割を入館料収入に頼っている。実際、年間30万人の入館料収入が運営を維持する最低ラインであるが、この長期休館、そしてその後の感染拡大防止のための入館者数制限をかけての開館は、日々の運営資金の確保すらままならぬ状況を生み出した。

具体的には、2020年度の総入館者数は最終的に約7万人にとどまり、その後も、ほぼ同水準の入館者数で現在まで推移している。それゆえ、日々の運営資金を確保するため、すでに1億円ほどの借入れを余儀なくされており、状況改善はすぐには見込めない。もちろん、これまでも収入の多角化には取り組んできた。2002年の高階秀爾館長着任以来、積極的な事業展開を行うと同時に、私なりの言葉にすると「イブニングツアーなど通常開館時間帯以外での高単価での入場者確保」「美術作品という不動産の動産化」といった視点から、館をあげて収益源の多角化に取り組んできた。その模索は、

3年前の西日本豪雨で切実さを増したが、この2年間は、その動きをさらに劇的に加速させざるを得なかった。しかし、収益は簡単には増えない。

大原美術館は、運営の継続さえ難しくなる。決して大袈裟ではなく存続の危機を感じるなかで、昨秋に実行した一つがクラウドファンディングであった。

もともと大原美術館には、後援会制度と、「第三創業基金」という二つの実施的な寄付制度があった。ただいずれもが、使途目的を「未来への投資」と定義して、日々のラニングコストに使用しない約束で支援を募っていた。

それから、違った見方をすれば、この二つの枠組みへの支援者は、すでに顔の見える方たちである。ただ、そうした方たちのみならず、大原美術館は、多くのアーティストや研究者、そしてほんとうに大勢の一般の鑑賞者にとって大切な場であることを、これまでの活動を通じて実感していた。

ならば、こうした非常時に運営存続への協力を仰ぐのであれば、近くでいつも大原美術館を応援してくださる方ももちろん、遠くから大原美術館を愛してくださっている方、そして日ごろは顔の見えていない方、さらには、この挑戦をきっかけに大原美術館に興味を持つてくださる方々とダイレクトにつながれないかと考え、クラウドファンディングに取り組んだのだ。

2020年10月26日から開始したクラウドファンディングは、1千万円の当初目標金額を6日間のうちに達成し、その後ネクストゴールとして3千万円を掲げ、最終的には12月25日の募集終了時点で2,348万円の寄付をいただく結果となった。

寄付者の総数は、1,700名を超した。寄付に際して、メッセージも寄せていただく仕組みになっているのであるが、日々それらを印刷しては、職員が目にする廊下の壁に次々と貼り足していた。

最初の1週間ほどは、インターネットの画面をみても、毎朝「うわ〜!」「すごい!」す



廊下に掲出された応援メッセージ

「いい！」と寄付された金額に喜んでくれた職員も、次第に、たくさんの温かい励ましのメッセージを通じて、こんなにも多くの方が大原美術館を大事に想ってくださっているという事に大いに励まされた。いわば、クラウドファンディングによって、大原美術館を大事に想ってくださる方々との、普段は見えない「つながり」や「関係性」を可視化する機会も得たのである。

今回のプロジェクトには様々な展開や後日談があるが、最後にその一つをご紹介します。ただ、近在の小学校で、ある一人の児童が、クラウドファンディング終了後になって、その事を知り、そこから仲間に声をかけ、寄付募集のチラシを作って、募金を始めてくれた。教員も、コロナ禍で学年を超えた交流ができず残念に思っていたところ、奇しくも、「生徒が自発的に動いて、全校に支援の輪が広がった」と喜んでいらっしやう。クラウドファンディングは、遠くまで情報を届けるツールだと思っていたが、こうやって身近なところで新しい関係を生みだしたわけである。

まだまだ当館の経済的な苦境に変わりはない。ただ、こんな時だからこそ、人のつながりは大切な財産と受け止め直し、その財産を次なるステップへとつなげてゆきたいと苦闘を続けている。

## 02 拡大する工芸／KOGEEI 石川県における国立工芸館移転後の状況

中澤菜見子 *Namikō Nakazawa* (石川県立美術館)

石川県でいま工芸に関するイベントを数えたらきりがない。私が知る限りでも2021年の秋だけで、国際北陸工芸サミット in 石川、KUTANism、GOFOR KOGEEI、KOGEEIフェスタ！、金沢21世紀工芸祭、KOGEEI Art Fair Kanazawaなどなど（展覧会除く）、手作り市のような素朴なものから、芸術祭といえる規模のものまで百花繚乱である。今回はこのような状況について、少しでも考えを巡らせてみたい。そこですまじは石川県の国立工芸館（以下、工芸館）移転関連事業について述べ、そのほか官民による工芸イベントの事例を紹介し、石川の現況について私見を述べる。

石川県は自治体として工芸館移転事業に関わっており、当館でも気運醸成事業として2017〜2019年度の計3回にわたり「東京国立近代美術館名品展」を開催（いずれも11〜12月）、また県内各地のミュージアムでも工芸館の所蔵品を借用した展覧会が計4回開かれた。当館での名品展に関しては、7室あるコレクション展示室の1室を使用したので厳密な入場者数はカウントできないのだが、コレクション展全体では3回の平均が1日あたり219人であった。なお2015、2016、2020年度のコレクション展（11〜12月）入場者数は平均183人/日であり、約1.2倍の増加である。2020年10月に工芸館がオープンしてからは、こうした大規模な共催事業は一段落した。

工芸館は金沢市街中心部からほど近く、金沢城、兼六園に加えて美術館、博物館が数多く立地する文化ゾーンに位置し、本来ならば開館に合わせて周辺一帯を賑やかす構



九谷焼の芸術祭 KUTANism



大原美術館クラウドファンディングのサイト

想であったのだが、残念ながらコロナの影響で県下のミュージアムは開館さえままならない時期が断続的に発生し、当初の見込みとは異なった静かなメモリアルイヤーとなっている。

一方、状況を鑑みながらではあるが、市町や民間による工芸イベントが復調してきている。

KUTANISM(クタンイズム)は小松市と能美市が中心となって、2019年度から開催されている。秋元雄史氏(練馬区立美術館館長)を全体監修に迎え、九谷焼と関りの深い自治体、作家、職人らが協働して「個性ゆたかな焼き物「九谷焼」を見る／知る／体感する芸術祭」をコンセプトとし、展覧会やガイドツアー、取材、ムービー公開など幅広いコンテンツを提供している。本イベントは文化と観光を両輪として振興することを主眼としており、実際にキャッチーな名称が着実に浸透し、都市圏のデパートから展示販売の依頼が来るなど成果を上げているという。

GOODKOGEIは民間団体が主となって企画・運営しており、こちらも秋元氏が総合監修。2020年度に企画がスタートしたが、コロナの影響で2021年度より本格的な開催にこぎ着けた。石川、富山、福井の3会場にわたり計20作家によるインスタレーションを展示する「特別展Ⅰ」と、作り手とデザイナーの協働による製品のアイデアを提示する「特別展Ⅱ」から構成されており、既存の工芸のイメージを覆し、新たな視点を投げかけることを企図している。非日常的な体験だけでなく、日常のくらしに引きつけた身近な楽しさを提供する新たな形の芸術祭といえるだろう。

実はこうした工芸イベント活況に、必ずしも工芸館移転が直接影響を及ぼしているわけではない。KUTANISMの場合は今回、ゲストキュレーターに岩井美恵子氏(国立芸館)を迎えて連携はしているが、基本的にどちらにも移転決定より以前から温められていた企画である。むしろこうした動きの最も決定的な要因は2015年の北陸新幹線

東京―金沢間開業である。初年度で計678億円とも言われるその経済波及効果のインパクトは大きく、これを契機として、石川県内で工芸文化の観光資源化があつたという間に進んだ<sup>1</sup>。もちろん工芸館移転がポジティブな影響を及ぼしていることは疑いようがないが、結局、文化だけでなく経済的なインパクトを伴ってこそ動く部分は大きいのである。

ミュージアムに携わる私たちは、こうした多様な動きを十分に意識しながらも、ミュージアムとしての役割、学芸員にしかできない仕事を果たすことが求められている。つまりは真摯な展覧会作りだと私は思っている。地域ゆかりの美術品を収集・保存することを使命とする当館は、移り変わりゆく石川の工芸を冷静に見つめながら、時宜を得たコレクションへの視点を提示していくことが責務である。その点に関しては、工芸館の存在や姿勢が大きな刺激となり、県内のミュージアムを内部から活性化してくれるのではないかと期待している。

工芸という言葉はかつて美術と工業の境界に位置づけられていた。しかし工芸の意味する範囲は今日、美術と工業の両方のベクトルへと拡大しつつあるように思われる。芸術という言葉がアートに取って代わられて久しいが、工芸も同様にジャンルとして成り立っていないほどに膨張していくのではないか。「石川のKOGEIな旅」とか「金沢でKOGEIな休日」が始まる日も近い。そんな中で自館の在り方を見失わないよう、掘って立つところをいま一度確かめる時期に来ていると感じている。



四代 田辺竹雲齋《WORMHOLE》2021 Photo: Masahiro Katano

<sup>1</sup> 日本政策投資銀行 北陸支店レポート「北陸新幹線金沢開業による観光活性化が石川県内に及ぼす経済波及効果」[https://www.dbi.jp/pdf/investigate/teahokukun/pdf\\_all/hokukun\\_1612\\_02.pdf](https://www.dbi.jp/pdf/investigate/teahokukun/pdf_all/hokukun_1612_02.pdf) 日本政策投資銀行 北陸支店、2016年

## 石巻文化センターの再出発

—同センター所蔵の美術作品を対象とする文化財レスキュー活動の終了報告—

三上満良 *Mitsuru Mikami* (元宮城県美術館)

東日本大震災の津波で大きな被害を受けて閉館した正会員の石巻文化センターが、2021年11月3日に石巻市博物館と改称して再出発した。

旧施設があった旧北上川河口の右岸地域一帯は広大な復興記念公園になり、後継施設は、最近まで仮設住宅がならんでいた内陸部に建てられた。新博物館は、地震による損傷と老朽化のために廃止された市民会館の機能を併せもつ大型複合文化施設として整備され、国や県が定めた10年という復興事業計画が終了する直前の1月に建物が竣工し、ホール部門はすでに4月にオープンしている。

建築設計は藤本壮介。大小の白い家々が東西に長く連なったような外観の建物の西端1階が展示室、2階が収蔵庫と学芸員室という配置である。施設全体の管理とホール部門が指定管理で、博物館の学芸部門は市教育委員会直属の組織として運営されるという。

石巻市の歴史と文化を育んだ「大河と海」をテーマとする通史展示のほか、震災前に寄贈を受けて展示の増設プランが出来ていた毛利コレクション（同市在住の毛利総七郎氏が生前に収集した10万点をこえる出土品、古文書、民具、アイヌ民族関係資料など）の展示室と、将来を嘱望されながら31歳で戦死した同市出身の彫刻家高橋英吉の作品展示室が独立して設けられた。

開館記念展は「文化財レスキュー 救出された美術作品の現在（いま）」と題する旧施設所蔵作品の被災と救出活動に焦点をあてた企画となった。



石巻市博物館（「まきあーとテラス」と命名された複合文化施設の左側部分）

考古、歴史、民俗、そして美術分野の資料、作品を収集してきた石巻文化センターは、震災後に文化庁が主導した文化財レスキューが最初に着手された施設だった。他分野に先んじて、美術部門のレスキューを全国美術館会議（以下、全美）が中心となって実施したことは周知のとおりである。水損した作品を宮城県美術館に移送して応急処置を施し、その後は専門家の手に委ねられた。彫刻と日本画は東北芸術工科大学で安定化処置や修復が施されたのちに再び宮城県美術館で保管し、素描や写真などの資料は国立西洋美術館、油彩画は神奈川県立近代美術館葉山館と東京藝術大学の保存修復担当者が処置に携わり、各々の施設で保管してきた。

竣工後の枯らし期間を置いて、開館直前の10月中旬に、前記の保管先から作品が新博物館に搬入された。救出された作品、資料のうちの一部は、これまでも地元での展示企画などの折に石巻市に返却されており、これで全てが戻ったことになる。

汚泥や漂流物が混じった津波が流入した建物から救い出された美術作品の現在の姿を市民に報告するとともに、改めてこのコレクションの存在を伝えようというのが開館展の企画趣旨のようだ。高橋英吉の木彫を核に収集されてきた、橋本平八、澤田政廣、圓鏑勝三、斎藤義重、李田たけを、桂ゆき、植木茂、鈴木実、澄川喜一、江口週、関根伸夫、小清水漸、菅木志雄、戸谷成雄、林範親、舟越桂、川俣正などの木を素材にした近代作品のコレクションは、この町の宝である。

しかし、救出されたものの傷跡や変色部が残ったままの作品も少なくない。文化財レスキューでは、オリジナルの状態を知る手がかりがないものは欠損部を復元せずに安定化処置で止めている。傷を負った美術作品をどのように扱うのかは、所有者である石巻市のこれからの課題となる。識者を交えて深く議論すべき問題であり、この開館展は、その契機になるであろう。



石巻に戻った高橋英吉《海の三部作》の展示作業

れる。その定義に従えば、石巻文化センターを対象とした全美の東日本大震災に係る救援活動は、着手から10年半を経て二心の終了を迎えたことになる。

ふり返れば、2011年4月に文化庁が設置した「東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会」は同年7月末には仙台の現地本部を撤収し、本体組織も13年3月に解散した。救援委員会の現地本部撤収後、11年10月に結成された地域内組織の「宮城県被災文化財等保全連絡会議」も、発災から6年目の17年3月に解散している。

全美は2011年4月に「東日本大震災救援・支援対策本部」を設置して美術分野のレスキュー活動を担い、同年11月には「東日本大震災復興対策委員会」を組織し、被災作品の移送や修復などの支援業務を行ってきた。両組織とも17年5月に活動を終えたが、その時点でも戻す施設が無かった石巻の被災作品は、今度開館した博物館に移送されるまで、全美が支援対象として継続管理してきた。

それにしても10年半は長かった。文化施設の再建は復興事業の最後となる。前述したように組織は解散し、担当者の多くが異動、転職、退職などで当時の職場を離れてしまった。私自身もすでに退職した身なのだが、石巻のレスキュー活動に関わってきた被災県の県立美術館の元職員として、石巻文化センターを対象とする全美の救援事業の終了を報告するとともに、長期間にわたった全美の手厚い支援に対して改めてお礼を申し上げるものである。

## 博物館法改正と美術館の基本機能の可能性

相澤邦彦 *Kunihiko Aizawa* (金沢21世紀美術館)

周知のとおり美術館を含む「ミュージアム」の基本機能は、「展示」「教育普及」「調査研究」「収集」「保存」に集約可能だろう。これらを基本機能とする施設または組織は、今のところ美術館を含むミュージアムを措いて皆無と思われる。従ってこの基本機能群の重要性とは、「博物館法にそう記されているから」とか、「(先進的とされる)欧米のミュージアムがそうなっているから」ではなく、美術館の代替不可能な社会的必要性または社会的重要性と換言できるはずである。ところでこの基本機能群には相関性または相互補完性があると指摘できる。例えば展示のためには保存と調査研究が不可欠であり、展示は教育普及そのものでもある。また教育普及のためには作品展示や作品が「在る」ことが欠かせず、教育普及や保存のための調査研究も欠かせない。そして収集は展示を強固にするものでもあり、保存体制と調査研究体制が構築されているからこそ収集も可能となる。なおこの観点によれば、これら5つの基本機能には優先順位がつけ難いとも思われる。

その一方で、国内外、国公立、国公立、規模の大小を問わず、多くの美術館では程度の差はあるにせよ、「展示(または展覧会)」がどうしても優先されがちな状況がおそらくあると捉えることができるだろう。とりわけ新型コロナウイルスの影響を含む様々な理由により、変化が激しく不確定要素の多い現況において、世界中の美術館も「生き残り」のた

めの競争下にあるといえるのだろうか。或いは「美術館」は注目を集めるために、経済効果や「まち（国）おこし」につながりうる展示（展覧会）活動を中心とした情報発信によって、公的領域（世界または社会）に積極的に働きかけることが各方面から要請されているといえるのかもしれない。しかし美術館による情報発信のためには、公共財としての美術品がそこに確かに存在し、その存在が保たれていること、そこで美術品に誰もが確かに対峙できること、そのための多角的な備えが十全であることが大前提のはずであり、だからこそ美術館の基本機能群とその相互作用が重要と考えられる。

さて、現在文化庁内に文化審議会博物館部会が設けられ、博物館法改正の議論が進められている。その会合資料や議事録からは、改めて日本には膨大かつ多様なミュージアム（水族館、動物園、植物園含む）があり、それぞれ設置主体、規模、特色が異なると同時に、様々な課題が現出していることが確認できる。または既存の博物館法が現場と乖離していることも再認識できる。しかし現場との乖離が明らかに認められつつも、本質的な法改正が今まで為されなかったのは、端的にその必要性が社会的に十分に認められなかったからでもあるのかもしれない。ただし法改正や法整備を行ったとしても、現場及び現実社会（生活世界）とのズレや乖離、または「改善に向かわないこと」がどうしても生じうると想像できる。既に指摘されているように、一連の大学制度改革とその後の状況もこれに該当すると思われる。

例えば、確かに現行の学芸員課程には様々な問題があるだろう。そしてこれをより細分化し、ミュージアムの各基本機能の専門性に即した内容にすることは有意義だろう。しかし各大学において今以上に学芸員課程を充実させることや、その内容更新に見合う人材（非常勤講師等）の確保などは決して容易ではないはずである。筆者は現在二つの大学の学芸員課程で講師を務めているが、現行の課程においてさえ大学は様々な調整に難儀しているように感じられる。また学芸員志望ではない学生が（筆者も実はそうだった）多く学

芸員課程を受講すること、或いは学芸員資格を有する者がなかなか学芸員になれない（ならない）ことに関しては、学芸員課程で学ぶことは必ずしも学芸員になるためでなくとも良いはずであり、学芸員課程内で美術館や博物館の基本を学びつつ、多角的かつ批判的に考察することも有意義であると考えられる。しかも今の日本にはなかなかそのような場も無いように思われる。

作品保存修復の領域に関して述べれば、仮に「一定規模の美術館には保存修復を専門とする学芸員（コンサヴァター）を1名以上配置すること」などの法を設けたところで、現状では全く人材不足であること、そのような人材養成機関も皆無に等しいことから、混乱が生じるのみでとても現実との整合性が取れないと考えられる。このことは作品管理（レジスター）、情報資料管理（アーキヴァイスト）に関しても状況は似ているのではないかと想像する。それ以前に、日本の「美術館」はスタッフ総数が本質的に少ないだけでなく、減少傾向にさえあるという問題がある。これらは、博物館法改正のみでは改善に向かわない課題と考えられる。

このタイミングで大幅な博物館法改正が行われるとすれば、近年の文化財保護法改正や一連の観光戦略と連動性があると考えていいのだろう。しかしその一方で、またはその背景として、日本における経済活動全般の減衰や社会の持続可能性（または地域社会の持続困難性）が喫緊の課題であることも疑いようがないのだろう。或いはミュージアム、大学、研究機関等々の機能充実が可能となるのは、一定の豊かさを備えた社会の存在とその安定的持続性が前提となると思われる。そして、「美術館そのもの」の本質的な問題に關する批判的考察が複数あることも確かである。しかし、美術館を含むミュージアムには代替不可能な機能が確かにあるはずであり、経済効果や観光拠点の機能性を付すことは、全否定は不可能としてもあくまでも二義的な目標とすべきだろう。さもなくば、経済性のみでは決してはかることのできない「社会的豊かさ」が根底から揺らぐこ

ともまた間違いないはずである。ただしそれ以前に、新しい博物館法において仮に「経済効果または観光拠点機能の付加」が明確に謳われたとしても、果たしてそれが日本各地の博物館や美術館において限なく実現し、実際に機能するかどうかについてはなかなか難しく、やはり「乖離」や「混乱」が絶えないのではないか、とも思われる。

1 相澤邦彦 「自然災害と美術館の保存の機能」 『美術手帖』 2021年4月号、美術出版社。

2 文化庁ウェブサイトに内 [https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikaiha/5kubutsukanhoseido\\_working/](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikaiha/5kubutsukanhoseido_working/) (2021年10月30日最終閲覧)

3 吉井俊哉 『大学は何処へ 未来への設計』 岩波新書 2021年、佐藤郁哉 『大学改革の迷走』 ちくま新書、2019年及び岩城卓二、高木博志編 『博物館と文化財の危機』 人文堂書院 2020年、pp.17-36、192頁。

4 相澤邦彦 「現代美術作品の保存修復における課題と限界」 吉村益信 『豚.pig.ink』の修復事例より 『兵庫県立美術館紀要』 第13号、2019年、pp.74,75。

5 Bourdieu, P., A. Darbel et D. Schnapper, *L'Amour de l'art: Les musées d'art européens et leur public*, Les Éditions de Minuit, 1969, 山下雅之訳 『美術愛好 ヨーロッパの美術館と観衆』 木鐸社、1994年、Duncan, C., *Civilizing Rituals: Inside Public Art Museums*, Routledge, 1995, 川口幸也訳 『美術館という幻想 儀礼と権力』 水声社、2011年、吉田憲司 『文化の「発見」 驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで』 岩波書店、2014年及び松岡秀治 『ミュージアムの思想』 白水社、2003年。